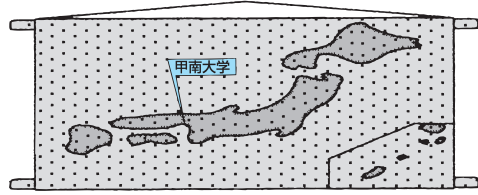


# Zephyr

〈第74号〉

ゼフィール・にしかぜ



<http://www.konan-u.ac.jp/kilc>

### 《特集＊異文化理解を深めるメディアコンテンツ》

★所長からのメッセージ：異文化理解とステレオタイプ	藤原三枝子	2
〔英語〕 Learning English and Canadian Culture Through Media	Stan Kirk	3
〔ドイツ語〕 ドイツ文化への理解を深めるメディアコンテンツ	野村 幸宏	4
〔フランス語〕 メディアコンテンツを使ってフランスを知る	ディディエ・シッシュ	5
〔中国語〕 中国・台湾という異文化への扉	石井 康一	6
〔韓国語〕 韓国文化の理解とメディアコンテンツ	金 泰虎	7
〔日本語〕 日本のアニメを見て日本語が学べるか	谷守 正寛	8

甲南学園創設者

平生鈞三郎

「世界に通用する

紳士・淑女たれ」



「英語＋1（第2外国語）」  
教育プログラム

「使える外国語教育」

国際言語文化センター機関紙（年3回刊行）

## 異文化理解を深めるメディアコンテンツ

国際言語文化センター准教授 吉田 桂子

甲南大学国際言語文化センターでは、韓国語、中国語、ドイツ語、日本語、フランス語、英語の運用能力の習得と各言語文化と国際社会全体についての理解を目指した授業、講義、学習支援、海外語学講座、社会人講習会、社会人講座を提供しています。

各言語文化を学ぶ方法には、どのようなものがあるのでしょうか。LCCや民泊施設の普及により、世界の国々を訪れる際の費用面のハードルが低くなってきました。しかし、移動や滞在期間の確保など、時間面ではまだ簡単に…という訳にはいきません。そのような場合、実際に他国を訪れなくても、さまざまな方法で情報を得て現地の文化を学ぶことは可能です。中でも、海外から日本に滞在・留学・訪問に来ている人々（expats・international students・inbound visitors）との交流は、日本にいながらにして直接彼らの文化について学ぶ絶好の機会です。周囲にそういった人々が多くない時には、人を通してではなく、それ以外のメディアを通して、情報を得ることができます。実際、他国を訪問する機会がある場合でも、多くの人が渡航前に訪問する国の言語や文化について最低限理解しておこうと考え、多様なメディアを用いて準備をしているのではないのでしょうか。

今回は、甲南大学国際言語文化センターの各言語の教員が、異文化理解を深めると考えるメディアコンテンツを紹介します。単にどのようなメディア（情報を伝える媒体）にどのようなコンテンツ（情報内容）が載せられているかだけでなく、それらを有効に活用する方法について、一緒に考えていきたいと思ひます。

# 異文化理解とステレオタイプ

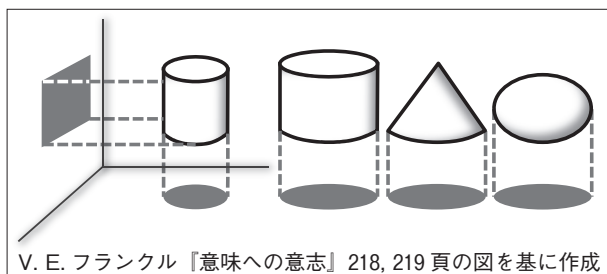
国際言語文化センター所長 藤原 三枝子

今回のテーマは「異文化理解を深めるメディアコンテンツ」ですが、メディアは往々にしてステレオタイプを生み出す、ということもいえるでしょう。新聞やテレビ、書籍、現代ではインターネットなど、日常生活をとりまく様々なメディアが私たちに情報を与えてくれます。まだ訪れたことが無い国でもそこに住む人々について私たちは一定のイメージを持っていることがあります。エスニック・ジョークは、ある民族や国民についてのステレオタイプを利用した話を作り出し笑いを引き出すものですが、有名なものに、沈没しそうな船から様々な国の乗客をできるだけ早く海に飛び込ませるために、船長が国民性に合った(?)声かけをするというものがあります。例えばドイツ人には「飛び込むのがルールですよ」、日本人には「みんな飛び込んでいますよ」、アメリカ人には「飛び込めばあなたは英雄!」、イタリア人には云々…という船長の掛け声に妙に納得してしまうのは、「ドイツ人は規則を大事にする」、「日本人は集団主義」、「アメリカ人はヒーローが好き」というようなイメージが私たちの頭にあるからですが、こうした国や民族に関するステレオタイプはメディアの影響などでかなり早い時期に私たちの中に形成されるようです。

手元にある日本の小学校1年生の「国語」の教科書(光村書店)をみると、最初のテーマ「はる」では「おはよう おはよう みんなともだち いちねんせい」と書かれています。同様に小学校1年生の「生活科」の教科書(大阪書籍)で第1課のテーマ「うれしいな1年生」では、「みんなともだちになろう」が最初に取り上げられているものもありますから、どうも日本では「みんなともだち」が大事にされていることが分かります。その一方で日本の生活科にあたるドイツの「事実授業 Sachunterricht」の手元にある1年生用の教科書(Cornelsen社)を見ると、第1課のテーマは「Ich(私)」で、この課は「Ich bin ich.「私は私」」で締めくくられています。いろいろな国の教科書を見ることで、その国が大事にしている教育の理念が見えてくる場合があります。

面白さだけでなく国民性とステレオタイプ、異文化理解の観点からお勧めしたい映画にフランス映画『スパニッシュ・アパートメント』(原題: *L'auberge espagnole*, 2002年)があります。「スペインの宿」というのはフランス語では「混乱の中の発見」という解釈もあるようですが、この映画は、ヨーロッパの留学制度である「エラスムス計画」によって、バルセロナにやってきたフランス人のグザヴィエが、同じく留学しているイギリス人、ドイツ人、イタリア人、デンマーク人、ベルギー人そしてスペイン人とルームシェアし、言語と文化のごちゃごちゃ状態の中で、価値観や行動様式が異なる若者たちとの共同生活をとおして成長していく青春物語です。この中で、イギリス人の姉ウエンディを訪問したウィリアムが、バルセロナに来たばかりにもかかわらず、「スペイン人は皆こんな風に喋る」と大げさな言い回しで茶化したことに腹を立てたスペイン人のソレダが「来たばかりなのにスペイン人を沢山知っているの?」と言り返すシーンがあるのですが、これは、「ドイツ人はこうだ」「イタリア人はこうだ」と決めつけることの無意味さを指摘しています。

『夜と霧』の著者として有名な精神分析学者のV. E. フランクルは『意味への意志』(原題: *Der Wille zum Sinn*)の中で、左のような図を示し、「次元的存在論」について述べています。ここでは、三次元の空間から二次元に投影すると同じ存在でも異なった形に写ること、その一方で互いに異なる物体をより低次の同一の次元に映し出すと同じ影になることが示されています。見たものに制約を受けて「○○に違いない」と決めつけるのではなく、違うように見えるの



V. E. フランクル『意味への意志』218, 219頁の図を基に作成

は見方の違いによるもので、実際は同じものかもしれないこと、また、同じように見えてもより高次から見るとその実、異なった存在である可能性も考えながら、個々の存在を理解していくことが異文化や人間を深く理解するためには不可欠であることも示しているといえるでしょう。

異文化に関してメディアをとおして間接的に情報を得るだけでなく、ひとり一人との直接的な出会いによって相手を多様性と統一の視点から深く理解していくことが求められている時代になったと思います。

V. E. フランクル著(2002年)『意味への意志』(山田邦男監訳) 春秋社

# Learning English and Canadian Culture Through Media

国際言語文化センター准教授 Stan Kirk

Recently I was surprised when my Canadian niece, who I thought had no interest in Japan, told me she is studying Japanese and wishes to live and work in Japan in the future. As her father is Vietnamese Canadian, I expected that she would be much more interested in Vietnamese than Japanese. So, I asked her how she became so interested in Japanese. She explained that a friend had loaned her an English manga book (*Naruto*). She liked it immediately, even before learning that the story is Japanese. Now she has a whole book shelf filled with manga. She also reads it on the Internet. She said, "Manga is really cool! I want to be able to read it in Japanese. Now I'm studying *kanji* on the Internet. I want to study Japanese at school and get a job in Japan in the future."

Her story reminded me of Matt, a Canadian guy I know who once studied Japanese at Konan University. He later trained to be a translator, and now lives and works in Yokohama. I asked Matt the same question I had asked my niece. He answered, "I became interested in Japanese pop culture without even knowing it. I watched Astroboy endlessly on TV, and completely fell in love with Super Mario Brothers on Nintendo. I just assumed that these cartoons and games were from the US, but when I learned they were actually Japanese, I became increasingly interested in Japan and its culture. I would see some scenes of Japanese life while watching an anime, and that would make me want to learn more about the country. That's why I chose to study Asian Studies and Japanese language at the University of Victoria."

I am amazed at the similar experiences of these two young Canadians and the power popular media to attract them to the culture and language of Japan.

What about using media for learning Canadian culture and English? It is not so simple. Although there is a growing number of Canadian "manga" authors, most are strongly influenced by Japanese manga, American media culture, or in the case of immigrants, by the culture of the country they came from. Also, Canada, as an immigrant country, is a nation of different cultures living together so does not have one unified culture. Therefore, much Canadian literature and popular media content is about the experience of belonging to one of the various ethnic groups in Canadian society, such as Chinese-Canadian, Indo-Canadian and Japanese-Canadian, Vietnamese Canadian, and so on. Some of it describes the tensions of living in a multi-cultural society.

One example is the works of the Japanese-Canadian novelist, Joy Kogawa. She was born in Vancouver before World War 2 and experienced the terrible problems of growing up as an Asian-Canadian at that time. In fact, her story is part of the bigger story of how Canada gradually changed from a very racist white society to a more welcoming multi-cultural society. Her most famous novel, *Obasan*, tells how Japanese Canadians were treated very badly during the war and how they did their best to become accepted as real members of Canadian society. It is difficult to read in English, so I recommend that you first read the Japanese translation (title: 失われた祖国) .

However, there is an easier version! Recently Joy cooperated with her granddaughter Anne Canute (a student at the University of British Columbia), a gaming app company, and the National Film Board of Canada to produce an easy-to-use interactive app called *East of the Rockies*. It is aimed mainly at Canadian young people, but because it is very interactive and the English is quite simple, it is a good tool for studying English while learning about the history and culture of Japanese Canadians and how Canada became a multi-cultural society. You can buy it from the Apple App store, and I strongly recommend it!

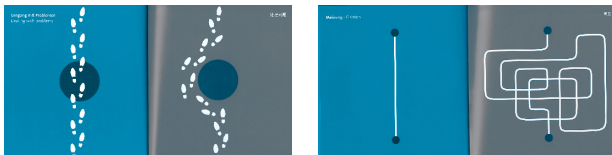
# ドイツ文化への理解を深めるメディアコンテンツ

国際言語文化センター講師 野村 幸宏

経済や人の移動のボーダーレス化によって、ここ数十年で異なる文化背景を持つ人々の価値観や考えを理解する必要性が増してきました。そして、大学などの言語の授業や文化を扱う講義やゼミなどでも頻繁に「異文化理解」というキーワードを目にするようになると同時に、異文化理解を学ぶための書籍やDVD、文化を扱ったテレビ番組からインターネットの掲示板等まで、近年様々なコンテンツが生まれています。

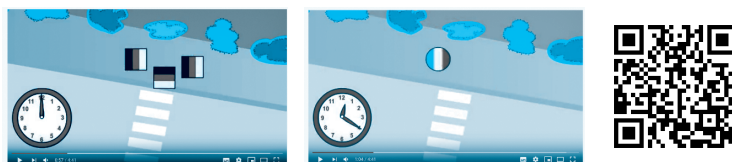
ヒト・モノ・カネの域内移動の自由を保障するEUに属し、移民の受け入れにも積極的なドイツでは、この異文化理解が現代社会を生きていく最も重要な人間の基本的な社会能力の一つとして扱われています。こうした流れの中、異文化理解の要素は積極的にドイツ語の授業にも取り入れられ、言語と並行して異文化間能力についても学ぶことができるよう、教材開発など様々な試みが行われています。その中で、今回はドイツ（西欧）文化への理解を深めるメディアコンテンツを2点ほど紹介してみようかと思います。

まずひとつ目は、“Ost trifft West”（英語：East meets West）という書籍、というかイラスト集を紹介しましょう。この書籍は、13歳で家族と一緒に中国からドイツに移り住み、後にベルリン芸術大学でデザインを学んだ中国人の女性、Yang Liuさんが、西欧と東洋の文化的な違いを簡単なイラストで表そうと試みたものです。



各見開きページの左側は西欧文化、右に東洋文化が表されています。画像ひとつ目のテーマは「問題の処理」、ふたつ目は「意見」です。Yang Liuさんがこのイラストで何を表そうとしたのか、想像できるでしょうか？これらをドイツ語の授業で使う場合は、例えばまずグループワークでこのイラストに対する解釈を簡単なドイツ語でまとめ、発表し、その解釈について再びグループワーク、あるいはクラス全体で議論する、という授業が考えられます。

もうひとつは、イタリアのGoethe-Institutで作成された簡単な動画コンテンツです。YouTubeで閲覧できます。このビデオも“Ost trifft West”と同様、ふたつの異なる文化（ここではドイツとイタリア）の違いを簡単なイラストをもとに、動画で表したものです。上のキャプチャ画像は、「12時に会う約束～ドイツの場合（左）、イタリアの場合（右）」というテーマです。これもやはり、ドイツ語の授業で扱う場合、解釈、発表、議論という手順が一般的なようです。



<https://www.youtube.com/watch?v=6-Cgb-TY2EU>

もちろん、異文化理解についてのより深い知識を得るためには、最終的に専門書を読むことになるのですが、こうした視覚コンテンツは、まずは異なった文化や習慣、物事に対する「異なったアプローチ」が存在することを目的にしています。「ええっ！」「ホント？」「理解しがたい！」など、学習者がちょっとした「カルチャーショック」を受けることで、活発な意見交換や質問が期待できるコンテンツです。

ただ注意が必要なのは、入門であるがゆえに、こうしたコンテンツで扱われる「文化」が極度に単純・一般化されており、かえって偏見を助長する危険性がよく指摘されます。それを避けるためには、授業において文化に優劣をつけたり、文化を評価するような姿勢ではなく、文化や習慣の違いが存在するという事実、そして（その授業で扱う、扱わないは別にして）そこには、様々な文化的、歴史的背景が存在し、文化とは一口に語りつくせないテーマであるということを常に学習者に意識してもらうことが重要になります。



# メディアコンテンツを使ってフランスを知る

国際言語文化センター教授 ディディエ・シッシュ

フランス文化を知るためには、勿論、教科書と書物の利用が不可欠ですが、インターネット、映画などを利用すれば、教室外でも学習の機会を増やすことが可能です。インターネット上の様々なフランス語のHPを通じて、フランス文化に触れ、想像や視野を広げることできるでしょう。

**RFI (Radio France Internationale)**：フランス国営ラジオの国際放送)のHP上で、Langue française (フランス語)をクリックすれば、学習に役立つ番組を利用することができます。(http://www.rfi.fr/lffr/statiques/accueil\_apprendre.asp)。

**Journal en français facile**「易しいフランス語で聴くニュース」(https://savoirs.rfi.fr/fr/apprendre-enseigner/langue-francaise/journal-en-francais-facile)という番組はとても貴重なツールです。ニュースを聴きながら、同時に画面上で、ニュースのスク립トも読めるので、理解できずに途方にくれる恐れがありません。また、Les mots de l'actualité (時事問題の言葉)という番組では、ニュースでよく使われる単語と表現を説明しています。Exercices d'écoute (ヒアリング演習)という番組では、ニュースの理解度をチェックするための簡単な質問も用意されています。

**TV 5 Monde** (https://japon.tv5monde.com)というテレビ番組のチャンネルもあります。映画、ニュース、ファッションや料理についての番組もあり、フランスの「日常の文化」(culture du quotidien)に触れることができます。

他の媒体もあります。その中で、フランス文化を最も色濃く反映しているのが映画でしょう。最近の映画には様々なジャンルがあります。映画は、国の文化政策の一環として盛んに制作されているのです。幾つかのテーマに分けて紹介します。

まず、パリの伝統的な雰囲気を楽しむためには、ジャン＝ピエール・ジュネ監督の『アメリ』(*Le fabuleux destin d'Amélie Poulain*, 2001年)をお勧めします。作品の舞台はモンマルトルです。19世紀の末から20世紀の前半。多くの芸術家や作家に愛されたエリアです。

次に、フランス文化には、「生活を楽しむ術」(art de vivre)という非常に大事なコンセプトがあります。特に、「バカンス」(vacances)という言葉の重要性を理解するために最適だと思われるのが、ジュリー・テルピー監督の『ル・スカイラブ』(*Le Skylab*, 2011年)です。1970年代末に、ブルターニュ地方で一緒にバカンスを過ごす家族の話ですが、ある女の子の目を通して大人の世界が描かれています。舞台は、40年前のフランスですが、ドキュメンタリーに近い自然なストーリー展開に好感が持てます。また、ある意味、「懐かしい」映画で、今のフランス人の心にも、「バカンスの文化」が根強く残っていることを再確認できる作品です。

最近のフランスは多民族社会になってきたため、「移民系」とい人物が頻繁に登場します。たとえば、エリック・トレダノ監督の『最強の二人』(*Les Intouchables*, 2011年)という作品は、アフリカ系の若者とブルジョア階級の中年の白人男性との間に生まれた絆を描き、社会の中の不平等と不公平を乗り越え、階級という壁も超えて他人と関わって行く可能性を示唆しています。ところで、フランス共和国の理想は「自由・平等・友愛」(liberté, égalité, fraternité)ですが、現実には、この理想とはほど遠いと認めざるを得ません。しかし、この作品のメッセージは、共和国の理念は虚言ではなく、希望を失わないことが大事であるという、非常に楽観的なものであるように思えます。

フランス映画についての最新情報を得るには、**Allociné**(http://www.allocine.fr/)が便利です。

# 中国・台湾という異文化への扉

国際言語文化センター准教授 石井 康 一

○中国語圏からたくさんの観光客が、日本という異文化を体験しに来ていますね。日本を直接体験する人の数が増えるのはうれしいことです。そして私たちも異文化体験から異文化理解へ！私が皆さんにお勧めしたいのは、百聞は一見に如かず、まず行ってみることに。旅行でも、夏の留学でも、交換留学でも結構です。あなたのこれからの人生に貴重な示唆を与えてくれることでしょう。

——異文化は自身を照らす鏡となり、新鮮な自己発見がある。思いがけない自分を再発見し、成長の糧とすることができる。そして、他国への敬意や親愛の情もわいてくる。自分が求めていたものはこれだ、というような爽快感を得られることもある。肉体的には疲れて帰国したはずなのに、時間が経つとまた行きたくなる。そうした不思議な心情を、異文化は呼び起こしてくれる。

(湯浅邦弘『テーマで読み解く中国の文化』ミネルヴァ書房 2016)

●大学が皆さんに提供する学習機会は、授業だけではありません。

チューターは、中国・台湾からの交換留学生在が、月・火・木・金の昼休み(12:20-12:50)と5限目(4:20-5:20)にグローバルゾーン・ポルト(6号館1階)であなたの来訪を待っています。中国語の指導に限らず、留学生在が好きな日本のコンテンツの話でも構いません。

そして来年2月には中国語強化合宿が白川台キャンパスで1泊2日で行なわれます。授業とは全く異なるかたちで、1回生から4回生までが留學生と共に一つの場で学びます。詳しくは国際言語文化センター掲示板などで。

○YouTubeにもたくさんの中国文化のコンテンツがあります。「アニメ 鹿鈴」で検索して下さい。20分の短編水墨画アニメ「鹿鈴」は1982年上海美術電影制片廠制作の名品です。台詞がないので中国語を知らなくても大丈夫です。

○中国のYouTubeともいえる优酷(<https://www.youku.com/>)。旅游(旅行)をクリックすれば、中国(と世界)のどこでも自由自在、自分がリアルに行きたいところを探すことができます。「日本」を検索すれば、中国人の視点からの日本を見ることもできます。

●異文化理解のためのおすすめ本

——書物を読むということは現実の体験なのです。体験の代替物ではありません。そしてそれ以上に、体験に枠組みと深さを与え、次なる体験へと導いてくれる何かなのです。

(四方田犬彦『人間を守る読書』文春新書 2007)

- ① 小野秀樹『中国人のころ——「ことば」からみる思考と感覚』集英社新書 2018
- ② 陳楸帆ほか『折りたたみ北京 現代中国SFアンソロジー』ハヤカワ文庫 2019
- ③ 呉佩珍編訳『我的日本 台湾作家が旅した日本』白水社 2018
- ④ 濱田麻矢訳『中国が愛を知ったころ 張愛玲短篇選』岩波書店 2017
- ⑤ 飯塚容訳『作家たちの愚かしくも愛すべき中国——なぜ、彼らは世界に発信するのか?』中央公論新社 2018
- ⑥ 毛里和子『日中漂流 グローバル・パワーはどこへ向かうか』岩波新書 2017
- ⑦ 漢字文献情報処理研究会編『電脳中国学入門』好文出版 2012
- ⑧ 胡金定『日本と中国の絆』第三文明社 2015
- ⑨ 今井むつみ 針生悦子『言葉をおぼえるしくみ 母語から外国語まで』ちくま学芸文庫 2014
- ⑩ 中国モダニズム研究会『中国現代文化14講(ドラゴン解剖学)』関西学院大学出版会 2014
- ⑪ 中国モダニズム研究会『中華文化スター列伝(ドラゴン解剖学)』関西学院大学出版会 2016
- ⑫ 中国モダニズム研究会『中華生活文化誌(ドラゴン解剖学)』関西学院大学出版会 2018



# 韓国文化の理解とメディアコンテンツ

国際言語文化センター教授 金 泰 虎

他文化、異文化の理解を深めるためには、様々な方法論、そして多様なツール (Tool) があります。その中でも今の IT (Information Technology) 時代には、ペーパーベース (Paper Base) の書物や資料よりはメディア (Media) 系のコンテンツ (Contents) が若い学習者には人気を集めています。まず、メディアコンテンツとは何かの定義をしてから内容を展開していきたいと思います。それはメディアが発信する情報、主にインターネット (Inter Net)・放送で提供される教材・テキスト (Text)・音声・動画などのデータ (Data) などのことであると言えます。

近年は、パソコン (Personal Computer) はもとよりスマートフォン (Smart Phone) の普及が広まり、メディアコンテンツを活用するツールと環境が整っています。常に携帯ができるスマートフォンは、日本社会における電車、バス (Bus)、地下鉄の中の風景までも変えています。その携帯可能なツールが普及される以前、車内ではペーパーベースのものを手にして読んでいる人が多かったのですが、今はほとんどの人がスマートフォンを手にとってメディアコンテンツから情報を得たり、知識を深めたりしています。いわば、車内の風景も知識の蓄積の方法も様変わりしています。そこで、韓国文化の理解を深めるのにもメディアコンテンツが重要な役割を果たす可能性の高いことが考えられます。

ところで、メディアコンテンツを提供する主体は、民放を含む公共放送局、会社、個人など多種多様に至っています。例えば、日本で韓流ブーム (Boom) を引き起こした韓国のドラマ (Drama) や映画は民放及び公共放送局、教材やテキストは営利を追求する会社、ひいては SNS (Social Networking Service) などを通じて個人もメディアコンテンツを提供しています。

要するに、メディアコンテンツは提供の主体が多様で、その種類も多くパソコンやスマートフォンを使い、とても簡単に必要な情報を手に入れます。つまり、誰もがいろんな主体が提供する多様なメディアコンテンツを利用して情報と知識を身につけることができます。

一方、それとは裏腹に溢れるメディアコンテンツの中で、どんなものを活用すれば良いのかという問題が発生します。正しくない情報、誇張したコンテンツが提供されることもあるからです。何よりも忘れてはいけないのはメディアコンテンツ、とりわけ映像系の場合は提供主体の意図と思惑に基づいて編集したり、制作されるのに対し、学習者は気付かないうちに、その主体の意向にはまる危険性をはらんでいます。異文化の理解を深めるツールとしてのペーパーベースの書物も作者の意図と思惑はあります。しかし、メディアが流す映像系のコンテンツよりは、自分のペースで理解し、容易にコンテンツを再検証することができる長所があります。その意味で、ペーパーベースは提供主体の思惑を批判的に検証しやすいのです。

日本の社会において韓国理解に関わるメディアコンテンツは溢れるほど氾濫しています。例えば、日本の放送局は、韓流ブームを起こした当初と同じような勢いで今も多くの韓国のドラマを放映しています。セリフから韓国語の会話や聞き取りの練習という目的には合致しているかもしれないが、あたかも架空の内容を実際の社会における現象として見なすのは危ないことです。実際、ドラマに感動を覚え韓国社会を憧れたり、場合によっては憎んだりすることも起きています。そこで感動と憧れの感情を抱いた人は韓国を訪ねるケース (Case) もありますが、言語の練習と言っても流行語が飛び交う場面をもってテキスト通り理解をしようとすれば、韓国社会を誤解することも生じ得ます。

韓国文化に対する誤解と誤情報を回避するとともに、正しい理解をするためには専門家に優れたコンテンツを紹介してもらったり、直接現地に赴いて確認したりする方法があります。韓国は、日本から一番近い隣国ですので安価で渡航ができ、なお日本と類似している社会秩序を構築しているため、日本人にとっては安心して現地で韓国文化の理解を深めることができます。



# 日本のアニメを見て日本語が学べるか

国際言語文化センター准教授 谷 守 正 寛

本号のテーマのメディア、異文化理解というのは概念が大きすぎ、筆者の立場からは言語という文化の一面をめぐる理解～言語学習という狭い方向で捉えつつ、アニメ等と日本語学習の繋がりを考えたいと思います。最近では外国人留学生が日本語を勉強し始めたきっかけを日本のアニメやゲームだったと言うのをよく耳にしますから、教師としては堅い教科書を使って日本語を教え、学習者の方が実はアニメやゲームの（RPGに出るキャラクターの）台詞のような楽しい日本語が知りたい、覚えたいなどと思っているなら、教室での需要と供給の中身に存する大きなギャップが滑稽にすら思えてしまいます。サブカルチャーの話になると意外な用語が学生から出てきて、初中級学習者だからと言って今のネット社会で出会うマニアックな知識は侮れず、紋切り型な知識ばかりを教授しては期待を裏切りかねません。例えば「弾幕」はゲーム用語で語義からなるほどと感心させられ、怪奇漫画に出る「魑魅魍魎」といった語の複雑さを学生が愉しんでいるといった具合です。但しそれらや特殊な固有名詞は語彙であって文法ではないので、文法レベルは初級でもコンテンツは上級レベルのものを提供するのがよい、とは言え、このギャップを埋める方法としては媒介語も活用し、稚拙な文章よりも最新の時事が分かる記事や随筆を扱うなど、平易な文法でも高度なコンテンツを提供してレベル的にも引っ張り上げることが教えられる側としても満足のいくものになると感じられます。

アニメがきっかけで日本語を学ぼうと思ったと言う或る上級レベルの留学生の話を知ると、ドラえもんに出てくるのび太の部屋の畳や襖、和式の家屋の構造、ランドセル、空き地の土管といった風物や風景が奇異で、実際にそこに住んで見てみたいということから学び始めたということなので、アニメの場合は言語習得自体ではなく動機づけを促すというむしろ間接的な効果にはなると言えます。つまりドラえもんの台詞で学べる日本語は大したものではないでしょうから、このような意味においてなら、アニメをはじめとする映像コンテンツに出てくる日本のものが効果的に異文化理解（狭義には言語学習の動機づけ）を強化していると言えるでしょう。

筆者自身の経験からはいくら洋楽が好きで繰り返し聴いたからといって、それで英語を習得したという実感は持てずにいます。昔はレコードに付属の歌詞カードにはミックジャガーの英語が一部聴き取り不能などと堂々と書かれていたものです。最近アマゾンのFire TVで聴くと同時に歌詞が流れ、謎だった歌詞が今では確かめられたりして音楽メディアの環境も激変し、目と耳で容易に外国語が同時に吸収できるようになって、何度も聴けばもしかしたら効果があるかもしれないと多少期待はできます。しかし、歌詞に出てくる程度の文法や語彙では満足できるレベルには程遠いと考えます。J-POPで日本語を習得するというのもしかりです。最近ではあちこちで字幕が表示されますが、その表現の解説がなければ学習内容として消化できる者はそうはいなさそうで、母語で聴いたり字幕を見たりしているのが現状でしょう。人気の宮崎駿のアニメも難解でそれだけの日本語自学習は困難でしょう。

筆者の場合は英語を多くの情報が入手できる、また発信できる（書く）手段として有用に感じおり、それは言うまでもなくインターネットの普及によるものですが、メディアコンテンツは外国語を通して（国境を越えて）関心のある情報を入手かつ発信できるという意味で、異文化理解（～知見を広める）を深めるものとなりえます。となってくると、メディアについて語るのはどんな視点からでも可能で、敢えて言語学習の立場からはあまり出しゃばって述べることはありません。アニメやゲームのマニアで日本語が優秀な学生がいましたが、大切なのはやはり文法と語彙だと明言していました。学習のきっかけにはなってもやはりこつこつと語彙を整理して書いて覚え、文の創成のためには文法をしっかり身に付けるべきだということです。メディアに接するだけで高いレベルの言語学習を望むのは難しいでしょう。従って、表題の疑問に対する私なりの答えは、甘くはないということです。